

【かいてんくん】

便所の次に、おぼけがよく出るところは、体育館じゃのう。

電球を消した夕方の暗い体育館の隅に、【かいてんくん】が出るんじゃ。わしは三度目撃して、一度は会話もしたぞい。

とにかくすごい勢いで回転しているもんじゃから、勝手に【かいてんくん】と名づけたんじゃが、本人（「人」という言い方が合っているかどうかは別にしてさ）も気に入っているらしいぞい。

わしは回転が苦手で、でんぐりがえしただけで目が回るくらいじゃが、【かいてんくん】は前方宙返り、後方宙返り、それも三回も五回も続けてできるんじゃ。

もっと体育館が広かったら、十回でも二十回でもできそうじゃのう。

「そんなに、かいてんばかりして、あきないのかのう」

わしがそうきくと、【かいてんくん】はあたまをかきかきしながらのう、「じつはぼくの回転は、君たちの歩行と同じなんだ。だからぼくはいくらでも回れるけど、ちっとも歩けないんだよ」

「そらあ、ふべんじゃのう」

「不便だけど、ちゃんと歩けたら、ぼくはおぼけじゃなくなっちゃう」

「おぼけじゃなくなるのが、いやなんかのう」

「ううん、ほんとは、ふつうの人間になりたいんだ」

「だば、こんどあるきかた、おしえてあげるから、そのかわり、かいてんおしえてくれんかのう」

「ほんとかい」

「わしは、うそとくそは、だいきらいなんじゃ」

「それなら、明日の夕方、またくるから、そのとき教えてね」

「いいとも」

というわけでのう、わしは翌日、放課後にまた体育館に行ったんじゃ。

だども、いくら待ってもものう、【かいてんくん】の凜々（りり）しい姿は現れないんじゃ。

けっきょくその後は一度も現れなかったが、おそらく【かいてんくん】は、お父さんに、

「おぼけは人間の真似をしてはいかん」

とかなんとかいわれたのじゃろ。

いずれにしてもものう、そのせいで、わしは回転だけは大の苦手のまま
じゃ。